

氏 名	せき ね さ おり 関 根 小 織
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 222 号
学位授与の日付	平 成 14 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 思 想 文 化 学 専 攻
学位論文題目	レヴィナス哲学の構造・展開・形成 ——現象学との関連から——

論文調査委員	(主 査) 助教授 杉 村 靖 彦	教 授 氣 多 雅 子	助教授 佐 藤 義 之
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、序論に続いて、第一部から第三部までの三部構成をとっている。各部はさらにいくつかの章に細分され、全部で十章となっている。論者が目指すのは、レヴィナス哲学の構造、展開、形成を、現象学との関連から解明することである。それは、この哲学がユダヤ思想に対してもつ特別な連関をあえて捨象し、それを純粹に哲学的な探求として捉えることに徹することを意味する。この作業において重要になってくるのが、現象学との関連という観点である。

序論では、このようなアプローチをとることの正当性と意味が説明されるとともに、論文全体の構成と概略が述べられている。レヴィナスにおける哲学的思考とユダヤ的伝統による思考の関係は、一方が他方を基礎づけるという関係ではなく、いわば翻訳的關係であると論者は言う。それゆえ、レヴィナスが両者に並行関係を認めており、それらが同一のテーゼに導くものであると考えているとしても、この二領域はそれぞれ別個に探求することができる。だからこそレヴィナスは、自分の思想がユダヤ思想から独立した一つの哲学として読みうることを強調するのである。そして、その場合には現象学との関連が重要になってくる。

第一部は「レヴィナス哲学の構造」を扱う。その全体を貫くのは、レヴィナスの言う「倫理の優位」は非合理主義的、教条的な主張ではなく、西洋哲学を全体性の立場とするラディカルな批判と結びついたものであり、「倫理の主張はとりわけ彼の全体性批判という主テーゼから説明可能なものである」とする見解である。

第1章では、レヴィナスの全体性批判の内容を明確化することが試みられる。論者によると、レヴィナスの全体性には、自己を拡大して他者を取りこむ「自己拡大型」と、自己と他者を中立的なものの内に溶解させる「自己消失型」の二種類がある。レヴィナスのフッサール批判は前者の型の批判であり、他者の問題へと導く。ハイデガー批判は後者の型の批判であり、主体性の問題へと導く。全体性批判がこの二種類を含んでいるがゆえに、自己拡大型全体性の批判は自己消失型全体性に帰着することはないし、また自己消失型全体性を逃れるために自己拡大型全体性に助けをもとめることも許されない。こうしてレヴィナスの思想はどこまでも断絶や分離を保持するのだと論者は主張する。

第2章では、この全体性批判の根拠が追究される。レヴィナスの全体性批判は「倫理」の名の下で行われるが、問題は全体性を批判させる倫理の倫理性とはどのようなものである。この点を明らかにしなければ、同様に主体の脱中心化を求めるハイデガーとの相違が明確にならない。脱中心化の存在論的解釈では触れえない主体の徹底的な受動性を顕わにするのが、死と時間に関するレヴィナスの考察である。この問題圏において、時間を存在との関係ではなく、他者が問題になり無限が関わってくる場面として捉えるというレヴィナス独自の姿勢が際立ってくる。これを論者は「時間を理念との関係としてとらえること」として説明する。それは「人間における理念と存在の乖離性、意味と存在の断絶に、人間特有の欠陥が持っているある積極性を見ようとする立場」である。レヴィナスの全体性批判はそこから発してくるのである。

第3章では、倫理を第一哲学とするレヴィナスの思想構造を成り立たせる思想的前提として、「イリヤ（ある）」の概念が詳論される。レヴィナスにおいて、イリヤは「存在論的側面」「審美一芸術論的側面」「懷疑論的側面」から考察されるが、

いずれにせよ、それは全てを無に帰した後にもなお残る無の不可能性であり、そのような仕方では「主体の究極的無根拠性を露呈させる概念」である。イリヤが導出される手続きはデカルトの懐疑やフッサールのコギトに似ているが、そこで残るのは私なき「覚醒 (veille)」としての底無き「匿名的意識」でしかない。あらゆる主体の基盤を奪うこの究極の不確実性が、レヴィナスの主体性探求を切実なものとしている。その探求は、新たな基盤を獲得するという形ではなされえない。レヴィナスの思索は、端的な無の不可能性への覚醒を「他者の無の不可能性」への覚醒として捉え直すという仕方で行くのだと論者は考えている。

第4章では、レヴィナスの倫理の主張の「基礎づけ」として「感性的主体性論」がとりあげられる。レヴィナス哲学の積極的側面は、「全体性に帰着してしまわない主体性」としての「倫理的主体」の考究にあるが、それは認識論的主体でも存在論における存在者でもなく、感性に基づいて成立する主体である。感性の考察は、超越的な他者がなお主体と関わりうる可能性を問うものであり、その意味で超越論的な次元に位置していると論者は言う。レヴィナスの議論は、感性の「自存性」と「依存性」を同時に際立たせるものである。『全体性と無限』は「享受」という概念によって前者を強調する。感性は一切のものから分離して自己を享受するのではなく、そこに認識論的ではない感性固有のリアリティがある。だが、享受する主体が即倫理的なものではない。享受の自存性を前提しつつ、それを破る苦痛において、主体は倫理的主体となる。かくして、レヴィナスの倫理的主体とは、「感性に基づきつつ感性の限界を露呈させるという逆説構造のなかで成立する感性的主体性」であると結論される。

第二部は「レヴィナス哲学の展開」へと議論を進める。ここでの考察は、言語の問題をめぐるデリダとレヴィナスの思索を突き合わせるという形をとる。論者によれば、両者はいずれもフッサール現象学から出発して、時間と他者を現象学の「躓きの石」として認めるようになったが、言語の問題に関しては還元不能な相違を残している。この相違ゆえに、論文「暴力と形而上学」におけるデリダのレヴィナス批判が生じ、それを真摯に受けとめることで、『存在するとは別様に、または存在の彼方』以降、レヴィナスの思想に新たな展開が生じたのである。

第5章では、レヴィナス批判の前提となるデリダの言語論の特徴が明らかにされる。デリダの思索は、現象学の臨界へと迫るものであるが、メルロ＝ポンティのようにフッサールの超越論的問題を生活世界の事実性に帰するのではない。しかし他方で、デリダはフッサールのように理念の目的論に依拠することを拒否し、言語を起点として超越論的問題に迫ろうとする。言語が示しているのは、存在の本質が「ある」という動詞の繫辞的用法に現れる「代替性」だということであり、デリダの立場は「代替性の存在論」であると論者は要約する。それゆえ、代替性の手前に存在そのものを見るハイデガーの存在論も、起源の「ノスタルジー」として、フッサールの目的論同様批判の対象となるのである。

第6章では、デリダのレヴィナス批判へと議論が進められる。論文「暴力と形而上学」におけるレヴィナス批判は、論者によれば、(1)他者を語りえないはずの哲学的言説で他者を語るという矛盾を犯している自己の言説の条件に対する無反省（超越論的問題の不在）と、(2)言語の暴力性の看過という二点に纏められる。また、この批判に対するレヴィナスの応答があった後のデリダのレヴィナス解釈の展開についても、附論という形で詳論されている。

第7章では、レヴィナスの言語論を焦点としつつ、デリダの批判がレヴィナスの哲学をどのように展開させたかが検討される。論者はレヴィナスの言語論について、用語上の変化はあっても基本線の変更はないと主張する。それに対して、超越論的問題の不在という第一の批判はレヴィナスによって真剣に受けとめられ、『存在するとは別様に』ではそれを受けた二つの方策が行われていると論者は見る。一つは、存在の意味と不可避性を正義という倫理的目的から説明するという策、もう一つは、自らの言説の自己矛盾を、「懐疑論」の名の下で、他者とそれを語ることとの共時化不可能性から発する思考として積極的に位置づけるという策である。レヴィナス哲学のこのような展開に、論者はレヴィナスとデリダの複雑な関係を読みとる。第一の方策は、デリダからすればなお存在を「現前」と見なす立場であり、批判の対象となる。他方で第二の方策は、デリダの差延概念と立場を共有しており、時間性を非現前的なものの発生形式として捉える主張となるのである。

第三部は、「補遺的な研究として」、主著『全体性と無限』の形成に初期レヴィナスの現象学研究がいかなる役割を果たしたかを解明する。

第8章では、レヴィナスの最初の著作『フッサール現象学における直観理論』の読解を通して、レヴィナスにおけるフッサールからの継承点と批判点が解明される。著者によれば、一方でレヴィナスは、フッサールの範疇的直観の理論が対象の

対象性（客観性）の概念を拡大した点を高く評価し、価値対象などの非理論の対象の間主観的構成を主張した。しかし他方で、理論の対象の非理論の対象に対する一次性を保持する「表象基礎論」を繰り返し批判した。フッサールに対するこの両面的態度は、『全体性と無限』にまで引き継がれていく。

第9章では、ハイデガーに関する諸論考から、レヴィナスのハイデガーに対する同意点と批判点が解明される。レヴィナスのハイデガー論は、1950年を境に受容から批判へと転じるが、論者はその指標をハイデガーの「了解」に関する解釈の変化に見る。1950年までのレヴィナスは、ハイデガーの現存在分析における了解概念が非理論的了解にまで拡張されている点に注目し、その斬新さを高く評価していたが、後にはその了解概念の広さに、全ての個別的存在者を普遍的存在に従属させるという新たな型の認識優位を見てとり、批判を向ける。この転回を通して、他者との関係をも存在了解から説明することを問題視するレヴィナスの存在論批判が明確化されたのだと論者は考えている。

第10章では、1959年に発表されたフッサール現象学に関する三論文の読解を通して、『全体性と無限』の基本的主張がそこで形成されていることが明らかにされる。三つの論文のうちだされているものは、論者によれば、有限性の積極的な記述（「現象学的《手法》についての考察」）、全的現勢性という理想への批判（「表象の破綻」）、感性的なものの形而上学（「志向性と形而上学」）と纏められる。そこから、レヴィナス哲学の基本的主張が現象学との関連のなかで形成されてきた様子が見てとられる。デリダからの批判を受けた変更点を除いて、レヴィナス哲学の基本線はこの時点で形成されていたと論者は結論している。

論文審査の結果の要旨

レヴィナスの哲学は、長らく周縁的な地位に甘んじてきたが、1980年代になってフランスはもとより欧米全域で再評価の気運が高まり、一挙に流行思想の座に着いた。間を置かずして我が国への紹介が始まり、精力的な研究者たちの努力によって著作の大半が邦訳され、その難解な思想と独特の術語は現代哲学に関心をもつ者たちの間で市民権を得たと言ってよい。しかし、レヴィナスの思想は、その尋常ならざる魅力のゆえに、距離を置いて研究することが非常に難しいものであることも確かである。この20年間、夥しい数のレヴィナス研究が発表されてきたが、他者の顔の非暴力性、第一哲学としての倫理、全体性の哲学としての西洋哲学といったレヴィナスの強力なテーゼに乗託し、それらのテーゼを教条的に振り回す類の研究が相当数を占めていた。これは、レヴィナス哲学とユダヤ思想との複雑な関係にも原因があるが、より根本的には、レヴィナスが現代哲学に与えた衝撃の大きさの反映であろう。しかし、再評価から20年が過ぎた今、ようやくレヴィナス哲学を一つの哲学思想として冷静に研究することを可能にする距離ができつつある。とりわけフランスでは、現象学研究の新世代が、アンリやマリオンの影響下でフッサールやハイデガーを「顕れないものの現象学」という問題関心から綿密に読み直し、その上であらためてレヴィナス哲学の意義を検討するという作業を遂行しつつある。「現象学との関連から」という副題をもつ本論文のレヴィナス研究は、そのような新しい潮流に属するものである。レヴィナスとデリダの突き合わせが本論文の骨組みの一つとなっているが、これは二つの流行思想を対峙させるだけの作業ではない。二人がフッサールとハイデガーをどのように読み、「現象学の再定義」をなしていったか、その中で二人の軌跡がどう交差したが、そしてその交差がフランス現象学の「顕れないものの現象学」化という文脈の中でどう理解されるか、そういった点に論者の関心は向けられている。つねにフッサールとハイデガーに立ち返り、この二人の現象学の巨匠の解釈と批判からレヴィナス哲学の「構造・展開・形成」が可能になったさまを跡づけるという綿密な分析作業が、本論文の全編を貫く論者の基本的態度である。

論文第一部では、レヴィナス哲学の構造が、全体性批判（第1章）、倫理第一哲学説（第2章）、倫理第一哲学説の前提（第3章）、その基礎づけ（第4章）という順序で解明される。そこでの議論は、レヴィナスの術語の内部に閉じたものとなることを避け、フッサールとハイデガーを始めとして、カント、ベルクソン、デカルト、サルトル、メルロ＝ポンティらとの対比という手順を踏んでいる。まず第1章で論者が強調するのは、レヴィナスが批判されるべき全体性への道として二種類を考えているということである。一つは称揚された主体が他者をとりこみ全体性へと至るという道、もう一つは主体と他者が共に中立的なものに溶がしこまれて全体性へと至るという道である。前者の全体性批判がフッサールに向けられたものであるのに対して、後者のそれはハイデガーに向けられたものである。このような分析によって、論者はレヴィナスの全体性批判が独断的な主張ではなく、フッサールとハイデガーの仕事を前提とし、この二人との真摯な格闘の中から生まれてき

たものであることを示している。第2章の議論は、この全体性批判の根拠という形でレヴィナス哲学の中心テーゼである「倫理第一哲学説」をとりだすことを目指すが、論者はレヴィナスの所論をただ繰り返すのではなく、全体性の批判を招来する倫理の倫理性をあくまで哲学的に理解するための道を探求する。そのような角度からレヴィナスの時間論の重要な意味が探り出される。全体性の批判の意味を主体の脱中心化に見るだけでは、レヴィナスとハイデガーの区別がつかない。レヴィナスの立場を脱中心化の存在論的解釈から分かつものが、死と時間に関する考察である。そこにおいて、ハイデガーの先駆的覚悟性のように時間を存在との関係で捉えるのではなく、死にうる他者が問題になる場面として時間を捉えるという立場がうちだされる。この考察の意味を、論者はカントの「理念」を引き合いに出して理解しようとする。それは理念から存在を説明するという観念論的な立場を意味するのではなく、「人間における理念と存在の乖離性にある積極性を見ようとする立場」である。レヴィナスの言う無限観念とはそのことにほかならず、この点でレヴィナスの倫理は認識批判と結びついたカントの道德の線上にあると論者は見るのである。

第3章では、一転してレヴィナスの「イリヤ（ある）」概念が問題にされる。論者のテーゼは、この概念がレヴィナスの倫理第一哲学説の思想的前提をなしているというものである。ここでも論者は、イリヤを言表不可能なものにとどめおくことをよしとせず、無の不可能性に関するベルクソンの議論や、デカルトの懐疑、フッサールのコギトラと突き合わせて、そこに含まれる超越論的問いを読みとろうとする。全てを無に帰した後もなお残る無の不可能性としてのイリヤは、デカルトのコギトから人称性を取り去った私なき「覚醒（veille）」であり、あらゆる主体の基盤を奪う不確実性である。そこに論者はレヴィナスの特異な主体性論の源泉を見る。レヴィナスの「倫理的主体」は、この基盤の不在を埋め合わせるものではない。むしろそれは、イリヤの「端的な無の不可能性」を「他者の無の不可能性」として捉え直すことを求めるのである。第4章の議論は、この倫理的主体の内実に迫るものであるが、論者は「感性的主体性論」という角度からそれを明らかにしようとする。倫理的主体とは全体性に帰着してしまわない主体性であるが、それは感性に基づいて成立する主体である。論者は、この洞察がレヴィナスの両義的なフッサール解釈と密接な関係を持つことを強調する。レヴィナスはフッサールの志向性概念における表象の優位をたえず批判する一方で、時間意識に関するフッサールの分析の内に、それとは別の志向性概念が作動しているのを見てとる。そこにレヴィナスは感じることの志向性そのものを見てとるのである。『全体性と無限』では、一切のものから「分離」し自存する感性のこの独特のあり方が、「享受」として捉えられた。しかし、感性は自存的であると同時に依存的でもあって、感性の自存性がその依存性によって破られるところにおいて、主体は倫理的主体となる。このような「逆説構造則」内で成立する感性的主体性こそが倫理的主体であると論者は結論づけている。

以上のようなレヴィナス哲学の基本構造を前提として、第二部ではその「展開」が論じられる。この論述の特徴は、『全体性と無限』（1961）から『存在するとは別様に』（1974）への展開を、レヴィナス哲学の内部からだけでなく、デリダとの突き合わせを通して、しかもフッサールとハイデガーに対する二人の態度を丹念に引き比べながら跡づけたという点にある。論者の見るところでは、レヴィナスとデリダの現象学批判は、現象学の内では非現前的なものを探求するという方向性を共有しているのであり、それゆえ現象学との関連で両者を突き合わせることは、それだけで有意味な作業となる。しかし、言語の問題を通して両者の相違が際立たせられると論者は言う。そのために、デリダはレヴィナスの哲学に共感を抱きつつも根源的な批判を投げかけたのであり、レヴィナスもまた、その批判を無視することができず、それに触発されて自らの思索を新たに展開させたのである。こうした事情を、論者はまずデリダの言語論の基本特徴を明らかにし（第5章）、その必然的な帰結としてデリダのレヴィナス批判の意味を説明し（第6章）、それに触発されてレヴィナス哲学がいかなる展開を遂げたかを見る（第7章）、という順序で論述している。

第5章では、「差延（différance）」という術語で有名になったデリダの発想をその現象学的由来から説き起こすことによって、論者はデリダ思想の根本部分とその言語論との本質的な連関を説得的に描きだしている。論者によれば、デリダの思索は、現象学の超越論的問題をメルローポンティのように生活世界の事実性に解消してしまうのではなく、その帰趨を徹底的に追求するものであるが、この超越論的思索の起点となるのが言語にはかならない。それはフッサールの理念の目的論を拒否することを意味し、その点でハイデガーの立場に接近するが、デリダはハイデガー存在論になお残る起源のノスタルジーをも厳しく斥ける。というのも、デリダにとって、存在とはその繫辞的用法に見られる代替性以外の何ものでもないからであり、そこでは起源も目的も別のものに送り返されて無化されるからである。このデリダの立場を、論者は「代替性の

存在論」として要約する。そして、この立場から引き出されるものとして、第6章でデリダのレヴィナス批判がとりあげられることになる。論者は論文「暴力と形而上学」におけるデリダのレヴィナス批判を、(1)他者を語りえないはずの哲学的言説で他者を語っているという矛盾に無自覚であることと、(2)言語の暴力性を看過し、純粹贈与を言語の本質と見なしていること、の二点へと明快に纏めている。フッサールとハイデガーに対するデリダの「現前批判」とレヴィナスの「全体性批判」は多くの点で重なり合うが、それだけにこの二点はデリダにとって見過ごすことのできない批判点となる。以上のように、二人の哲学者の重なりとずれを、論者は現象学を背景にした的確に捉えだしている。この作業を受けて、第7章で、デリダの批判がレヴィナスの哲学をどのように展開させたかが論じられることになる。論者の主張は、レヴィナスはデリダの二つの批判のうち第一の批判のみを受け入れて、自己の哲学を軌道修正したというものである。実際、レヴィナスは『存在するとは別様に』でもなお存在に準拠しない純粋な意味作用としての言語を追求しており、用語はともあれその発想に変更は見られない。この点でレヴィナスとデリダの立場はあくまで異なる。他方、超越論的問題への無自覚という批判に対して、この著作でレヴィナスは二つの方策を用意していると論者は言う。第一は、存在の不可避性を正義という倫理的目的から説明するという案、第二は、語られる他者と他者を語ることとの共時化不可能性から発する積極的な思考としての懐疑論という形で、問題となった矛盾を正当化するという案である。このように整理することで、論者はレヴィナスとデリダの思索が最終的に共有する論点を明確にできている。すなわち、第一の案は、デリダからすればなお存在を現前と同一視する立場として批判すべきものだが、第二の立場はデリダの差延概念と重なるものであり、時間性を非現前的なものの発生形式として捉える主張となるのである。

最後の第三部は、『全体性と無限』を発表するまでの初期レヴィナスの現象学研究に充てられている。論述の密度は一・二部よりも若干劣るものの、現象学との関連からレヴィナス哲学の特徴を捉えようとする論者の態度は一貫している。ここでは、フッサールとハイデガーに関する初期の諸論考を通して、レヴィナス哲学の主要テーゼの形成過程が辿られるのである。レヴィナスの博士論文『フッサール現象学における直観理論』（1930）に関しても（第8章）、初期レヴィナスのハイデガー論に関しても（第9章）、論者はテキストの丹念な読解を通して、レヴィナスにおけるフッサールとハイデガーからの継承点と批判点を明確化し、それらが『全体性と無限』の問題関心にどう通じているかを論じるという手順をとる。第8章では、レヴィナスがフッサールにおける対象性（客観性）概念の拡大を高く評価し、価値対象などの非理論的对象の客観性の間主観的構成という発想に大きな意味を認めた点と、にもかかわらず理論的对象に一次性を認めるフッサールの「表象基礎論」に一貫して批判の眼を向けていた点が確認される。第9章では、ハイデガーの現存在分析における了解概念の拡大が、1950年までの諸論文では認識の優位を突き崩して非理論的对象にまで了解概念を延長する斬新なものとして肯定的に受けとられていたのに対して、1950年以降は、そこに非理論的对象との関係をも個別（存在者）の普遍（存在）への包摂という仕方では説明する新たな型の認識の優位を見てとり批判されるようになった点、そしてこの転回が他者関係を存在了解を逃れるものとして捉えるという問題意識の発生と軌を一にする点が確認される。こうして、二つの章の分析を通して、論者は初期レヴィナスのフッサールとハイデガーに関する所論から、全体性批判と他者の問題という『全体性と無限』の主要問題の萌芽を識別するのである。最後の第10章では、『全体性と無限』の発表直前の1959年に出た三つのフッサール論がとりあげられる。この三論文は高度に専門的な現象学論に見えるが、論者はそこに『全体性と無限』の基本的主張が現象学との関連で素描されているのを見てとる。すなわち、それらは有限性の積極的記述としての現象学、フッサールの地平概念から全的現勢性の不可能を告げる「現れないものの現象学」、非対象化的志向性における「感性的なものの形而上学」をそれぞれ提示するのであり、デリダの批判を受けた変更点を除いて、この時点でレヴィナス哲学を構成する基本的主張が形成されていたと論者は結論するのである。

以上のように、提出論文の全編を通して、レヴィナスの強力な主張に引きずられることなく、その哲学の概念構成をフッサールやハイデガー等他の哲学者を参照しながら慎重かつ綿密に解きほぐしていく論者の分析力、論述力の高さは際立っている。わが国における新たな型のレヴィナス研究の始まりを告げるものとして、高く評価できる研究である。しかし、レヴィナス哲学の細部にわたる分析に意を注ぐあまり、論文全体を通していかなるレヴィナス像がうちだされるのかという点が十分明確にされておらず、論文の構成という点で若干不満が残るのも事実である。とはいえ、これは提出論文の質の高さをうち消すものではなく、提出者が今後の研鑽によって乗り越えていくことのできる事柄であると思われる。

以上審査したところにより本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2002年4月16日，調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。